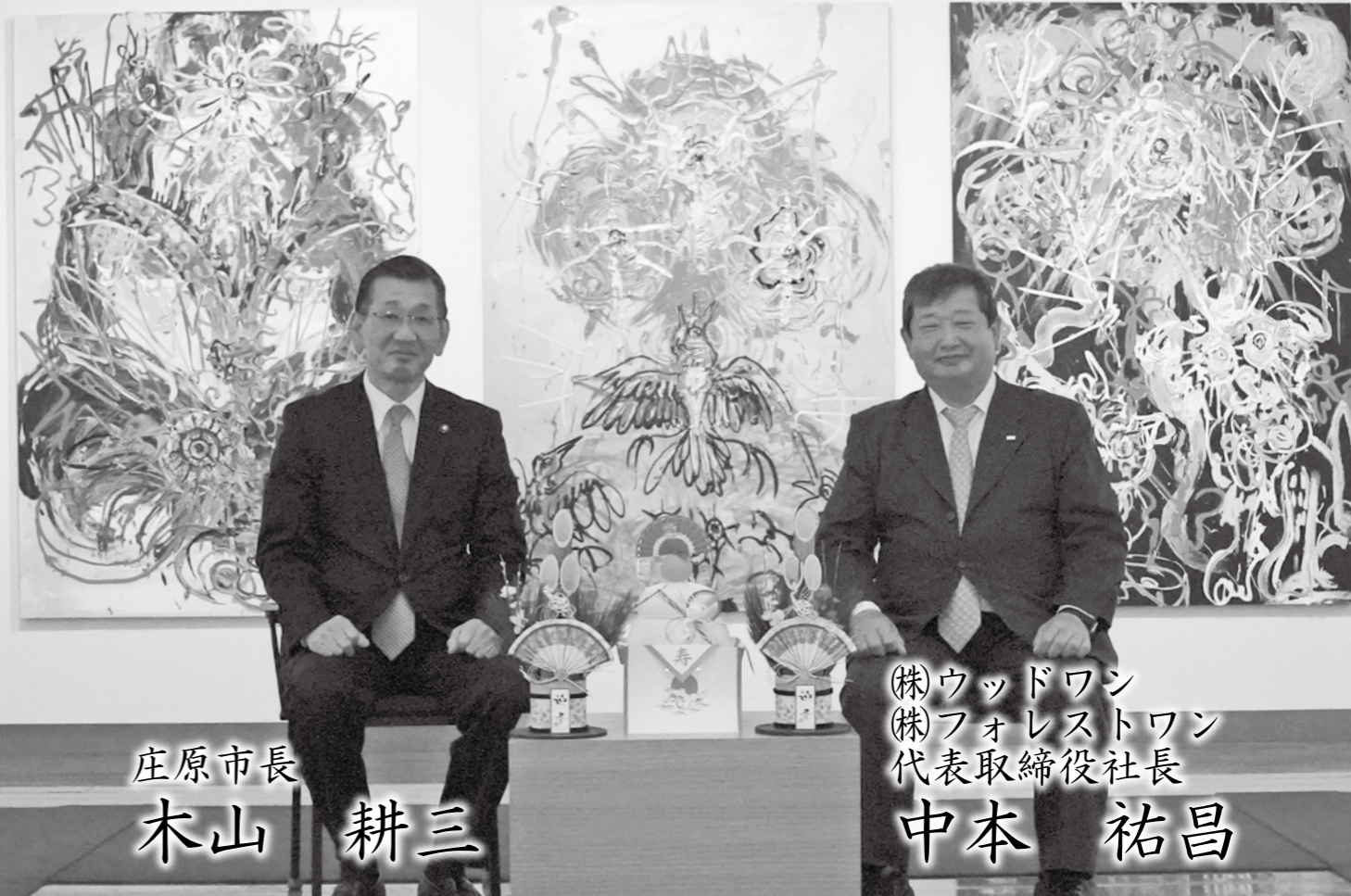


新春特別対談

未来を拓く、森林づくり



庄原市長
木山 耕三

(株)ウッドワン
(株)フォレストワン
代表取締役社長
中本 祐昌

明けましておめでとうございます。新しい年がスタートしました。

今号は、庄原の林業の将来展望をテーマに、昨年11月に本市への新工場建設に関する立地協定を締結した(株)ウッドワン・(株)フォレストワン 代表取締役社長中本祐昌さんと木山耕三市長による対談の様子をお届けします。林業振興に関するそれぞれの思いを語っていただきました。

(対談日 12月16日)

はじめに

市長 本日は、ここウッドワン美術館を対談会場とさせていただき、ありがとうございます。

このたび、立地協定の締結を終え、私たちも含め林業関係者は大変喜んでいきます。

中本社長 ありがとうございます。

庄原に進出させていただくことになりましたので、ぜひ、今後ともよろしく願います。

環境林から経済林へ 価値を創出する

市長 中本社長と初めてお話しすることができたのは、平成27年のことですね。

中本社長 木山市長の方から声を掛けていただきましたが、この時から市長の熱意をひしひしと感じました。

市長 私は、市長に就任する前から、本市の林業活性化についてずっと考えていました。庄原市は関西以西では最も

広い面積を持っており、私たちは小さい頃から山と田んぼと牛に囲まれて育ってきました。これら第一次産業で生活を営んできたわけですが、山については、木材が外材にシフトしていったことで、国産材の価格は低迷し、林業の採算は悪化しています。森林の荒廃も進みました。

こうした現状から、生活の糧としての「経済林」は、役目を終えたのではないかという認識でした。

しかし、人類に欠かせない酸素の供給と水源の涵養を果たす森林を「環境林」と位置づけ、環境の側面から林業振興を力強く支援することで、「経済林」としての価値を保つことができるのではないかと考えていました。

そこで、県内産の木材に精

通し、県内で生産活動を展開、木材産業に加え森林環境への理解も深い事業者との連携が必要であると考えました。

それが(株)ウッドワンであり、中本社長しかいないと強く思いました。

その後は、継続的に意見交換を重ね、庄原の森林にも視察に来ていただきました。

私も、ニュージーランドにあるジュエケンニュージラードの子会社)の社有林と工場を視察させていただき、現地の管理の行き届いた森林と原木の製材工程から、中本社長の森林・林業に対する意気込みを感じ取ることができました。

中本社長にとって、庄原の印象はいかがでしたか。



▲ウッドワンの社有林(ニュージーランド)

中本社長 ここ廿日市市吉和は、前会長である父が生まれた場所、ウッドワン創業の地ともいえる場所です。

ここには私たちの所有する山林があり、父が開発を始め、今は兄が引き継いでいます。

庄原の環境は、この吉和と似ているという印象が第一にありました。ただし、大きな違いが一つあります。

吉和を含め広島県の西側、太田川水系周辺はスギが中心になります。一方で、庄原はヒノキが中心で、全く違う樹木の構成になっています。

私は、子どもの頃に「ヒノキは神様の木だ」と教えられました。歴史的な建物を見ても、多くはヒノキが使われているのが分かると思います。スギを床に使うケースはまず

ありません。

「スギ造り」と宣伝してもあまり高級な感じはしませんが、「ヒノキ造り」と言うと、お客さんが反応してくれます。

庄原には、伐採適齢期を迎えたヒノキが豊富にあるというところで、大変興味を持ちましたし、可能性を感じました。

市長 庄原のヒノキは県内一の蓄積量(843万立方メートル)を誇りますが、実は我々も子どもの頃から「とにかく山へヒノキを植えよう。ヒノキがしっかりとした財産になるんだ」と教えられてきました。私の親も、その先代から日々教えられていたようです。

社長の話を聞いて、先人が庄原の山々へヒノキを植えたというのは、先見の明があったのだと改めて思いました。

庄原の皆さんの熱意に心が動かされた

市長 令和元年には、(株)ウッドワンと庄原市で、「庄原材活用のための連携協定」を締結しました。

それを機に、庄原産材の供給体制や、本市での森林資源



▲庄原材活用のための連携協定締結(令和元年)

の循環、継続的な森林資源の活用などについて、協議・検討を重ねることができました。

この間、地球温暖化対策などの環境の面から、森林の重要性が再認識されましたし、新国立競技場の建築で国産材が取り入れられるなど、国産材が注目され始めました。

このとき、外材から国産材へといった動きも加速する、まさに国産材活用の新時代が来ると確信しました。

こうした背景を踏まえ、本市へ製材所を誘致できないかと思ひ、中本社長へお話をさせていただきました。そういつた中で、庄原市に新工場の立地を決断していただき、本当にうれしく思います。

中本社長にとって、新工場



なかもと ゆうしゅう
中本 祐昌 さん

昭和35年生まれ。
昭和59年、(株)住建産業(現(株)ウッドワン)に入社。
平成13年、代表取締役社長に就任。
翌年、社名を(株)ウッドワンに変更。
平成28年からは、100%出資子会社である(株)フォレストワンの代表取締役社長を併任、現在に至る。

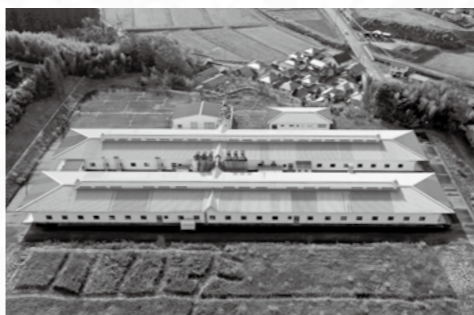
の立地を決断された要因は何でしたか。

中本社長 一つは先ほども申しましたが、庄原には豊富なヒノキがあることです。

やっぱりヒノキというのは、私たち建材メーカーとしては手掛けたい、建材として活用したいものであったので、それが決め手の一つになりました。

二つ目に、原木の供給体制が整ったことです。ニュージールランドやこの吉和であれば、私たちの社有林があるため、原木を確保することは可能です。

しかし、庄原には山を持っていないため、工場を立ち上げて木材が集まらない。工場



▲工場建設予定地(新庄町)

が動かせないということにもなりかねない。

このたび、庄原の林業関係者の皆さんに協力いただけるとい確信が持てましたので、進出を決断することとなりました。

そして最後は、やはり市長や林業関係者の皆さんの熱意に感銘を受けたというのが、大きな要因です。

市長 ありがとうございます。新工場には材を安定的に提供する考えでいますし、またそのことが、広く木材関係者にPRできればと思っています。

持続可能な循環型林業を目指す

市長 新工場の誘致によって、大径材を含めた庄原産材の商品開発を担ってもらえることに大きく期待をしています。

現在の庄原産材の課題は、先人たちが植えて育ててきた木材のほとんどが市外・県外に出荷され、庄原の名前が残っていないこと。また、豊富にある大径の木材をどのように活用するかということだと考



木材利用の裾野を広げる
それが庄原に対して
貢献できることだと思おう

えています。

木材を新工場に出荷できるようになることで、庄原産材の名前とともに、魅力を全国にアピールできるようになると思います。知名度が向上すると、新たな商品開発、木材産業の新規参入が期待できます。

また、運搬経費などのコスト削減にもつながりますし、木材需要の増加から森林所有者へ利益が還元され、循環型林業に近づくと考えます。

中本社長 私も林業において循環というものが重要だと考えています。

林業をはじめ「業」とつく

ものは、持続できて初めて「なりわい」になると思います。

林業というのは、植える人、育てる人、伐る人の三代続いて成り立つわけですが、その伐る人がまた新しく植えることが重要で、循環させていかないことには「なりわい」にならない。

私たちは、ニュージールランドの社有林で植林から行っていきますが、木を伐った後には必ず苗を植えています。だから同じだけの面積がずっと確保されている。

そしてその上で、木が一年間に成長するだけの量を、毎

市長 庄原の森林では、まだ、木を伐った後に新しく植えるというところまで意識が向いていませんが、中本社長の話のように、植える→育てる→伐る→使う→植えるといった循環型林業を作り上げ、主伐後の山には必ず新しく植林するという考え方を定着させたいと思います。

今まさに、世界的に環境への注目が集まっている中で、国も森林環境譲与税を創設し、森林整備に関する施策を推進しています。

こういったものをしっかりと活用していきながら、資源の循環を力強く後押ししてい

たい。それを続けていくことが、森林所有者への利益還元、市が打ち出している「儲かる循環型林業」の実現へつながるのではないかと考えています。

ブランド化の推進

市長 この庄原という地域において、基本は第一次産業の米であったり、牛であったり、森林であると考えています。そして、これをしっかりと産業にするのが私たちの仕事だと思っています。

これまで、積極的なPRやコンテストへの出品などを行うことで、農業では「こだわり米」、畜産業では「比婆牛」のブランドを作り上げ、農家の所得向上や後継者の育成につなげてきました。

林業についても、これからブランド化を進めることで、収入がしっかりと得られるような仕組みを確立していきたいと考えています。

中本社長 庄原の森林というと、やっぱりヒノキだと思いがちです。同時に庄原のヒノキの特徴は高齢・大径であること



ブランド化を進めることで
利益を還元し
循環型林業につなげたい

そういうものをいかに使っていかで、ブランド化できるかどうかが変わってくると思います。

現在の状況を考えてみると、木材のブランドというものはほとんどないと思います。

秋田杉や吉野杉、吉野杉などはあるものの、大径材を扱うようなマーケットがなくなってしまうというのが、実際のところだと思います。

そういう中で、実際に製材を行いつながりになります。その庄原材の特徴を生かしてブランド化できる道を模索していきたいと考えています。

また、原木は丸いため、四

角形に製材すれば、必ず余る部分が出てしまいます。

ブランドをつくりながらも、一方では、そういうものを活用していく流れを作らなければならぬと思います。

先ほども申しましたが、幸い、ヒノキはスギよりも材としてのブランド力があり、人々の受けも良いので、ブランド化に取り組みやすいのではないかと考えます。

これらを進めることによつて、地元も、林業関係者も、そして私たちも、儲かっているような構図を実現したい。口で言うのはたやすく、実際はかなり難しい話ではありま



▲庄原産材を活用した机と椅子

すが、それを努力してやっていこうと考えています。

そして、庄原の山林が持続的な山になっていけば、私たちにとっても一番うれしいことだと思っています。

市長 市としても、この事業が成功するように、木材の供給をはじめ、積極的に支援していきたいと思っています。

市内の林業振興には、多くの皆さんの協力が必要不可欠です。

これからもしっかりと連携していきたいと思っております。引き続きよろしくお願いたします。

本日はありがとうございます。

対談を終えて

対談を終え、木山市長は市内の林業の将来展望について、次のとおり話しました。

①ブランド化の推進

庄原産材のブランド化は、今回の製材所誘致によって、実現に向け一歩近づきました。ブランド化が進むと、知名度の向上につながりますし、建築資材や家具、おもちゃなど、さまざまな用途に活用されることになるでしょう。

庄原産材の商品化・ブランド化が進むと、森林所有者や



▲庄原産材を活用したお試しオフィス

林業事業者への利益還元につながります。

それを推進するためにも、公共施設の建築材や備品などへ積極的に庄原産材を活用したいと思っています。

これらを進めるためには、(株)ウッドワンをはじめ木材関連事業者の皆さんの協力が不可欠です。一緒に知恵を出し、庄原に木材の産業地帯を創り上げたいと思っています。

②「経済林」「環境林」の価値を創出

多くの人が森林の価値を再認識することで、より価値の高い森林に育てていく機運が高まるのではないのでしょうか。その結果、これまで手入れのされていない森林も、間伐などを行って健全な状態に誘導し、「経済林」に生まれ変わる。

公益的な森林機能を持つ「環境林」の整備についても支援を行い、「経済林」としての価値につなげていく。

そして、「経済林」「環境林」両方の視点から森林を守ることと、豊かな恵みをもたらす森林の機能が発揮されると思います。



▲森林体験ツアーの様子

③次世代の林業を担う人材の育成

現在、森林体験交流施設「森林の学舎 比和」を拠点に、市内外の小中学生を対象とした森林・林業体験を行っています。また、昨年から取り組んでいる森林体験ツアーでは、都市部の子どもと保護者が本市に訪れ、森林への関心を高めるとともに本市の魅力を感じてくれています。

幼いころから森林の役割や恵みに触れ、森林や林業への関心を高めることで、将来の林業の担い手育成につながると考えています。

④木と触れ合う日常

これらを実施する中で、より多くの人に関わっていただき、一緒に森づくりに取り組んでいければ幸いです。

森林に親しみ、林業を身近に感じることで「家を建てる」ときには庄原材を使おう」と思う人が増え、木材の地産地消が進むことを期待しています。

将来は、手入れが行き届いた人工林と、適度に伐採更新されている天然林により里山風景が形成され、子どもから高齢者まで、森林でレクレーションやセラピー、森林浴などを体験している。山の恵みを感じながら、豊かな暮らしが守られている。そんな人々の営みが、庄原で見られるようになることを目指していきたいと思っています。

会場：ウッドワン美術館（廿日市市吉和）

平成8年に、(株)ウッドワンの所蔵する美術品約800点を展示・公開するために開館された美術館。

近代・現代の日本絵画、エミール・ガレのガラス、ドイツのマイセン磁器、幕末明治期の薩摩焼などを所蔵している。

背景の絵画は、現代アーティスト小松美羽さん作「大調和と祈りの聖島」。厳島神社の大鳥居の修繕工事完成に伴って奉納された作品。

